

平成 31 年度

とまりおおつかこふん
泊 大塚古墳現地説明会資料



©2019 九州歴史資料館 撮影：岡寺良氏

泊大塚古墳上空からの眺め（今津湾方面を望む）

日時

平成 31 年 4 月 13 日（土）10：00～

場所

糸島市泊 626（泊大塚古墳上）

糸島市教育委員会

1. はじめに

糸島市教育委員会では泊大塚古墳の東側法面崩壊を受け、平成 31 年 2 月から緊急の発掘調査を実施しています。

泊大塚古墳は糸島地域を代表する大型の前方後円墳のひとつで、古墳のある場所には「大塚」という小字名がついており、古くからお墓であることが認識されていたことがわかります。現在も泊地区のシンボルとして地元の皆さんに大切にされ、守り伝えられています。

しかし、約 30 年前に墳丘の測量調査が実施された後は発掘調査は行われておらず、詳しい構造や築造年代については謎のままでした。

今回の現地説明会では、初めての発掘調査の成果について速報します。

2. 古墳の位置と周辺環境

泊大塚古墳は志摩半島の南東部、標高 10～20mの舌状丘陵^{ぜつじょうきゅうりょう}の先端に位置しています。同一丘陵南西側の竹林の中には御道具山 1・2 号墳があり、現状では泊大塚 1 基と御道具山 2 基の計 3 基を纏めて泊古墳群と呼んでいます。古墳群東側の丘陵下には現在、一面に低平な水田地帯が広がっていますが、ここは主に近世以降の干拓地であり、古墳築造当時は博多湾と繋がった今津湾がこの付近まで入り込んでいたと考えられています。古墳群はこの内湾を望む丘の上に位置しており、古墳の被葬者と海との深い関係が伺えます。

泊古墳群のすぐ北西にある元岡丘陵（現九州大学伊都キャンパスのある場所）には 70 基以上の古墳で構成された元岡古墳群が立地します。この中には西暦 570 年にあたるとされる「庚寅」を含む金象嵌^{きんぞうがん}の銘文^{めいぶん}が 19 文字入り、今、国の重要文化財に指定された大刀が出土した元岡 G6 号墳も含まれています。

このように泊から元岡にかけての一带は、糸島地方を歴史を考える上で貴重な古墳の集中地帯であることがわかります。

3. 泊大塚古墳の調査・研究略史（江戸時代～現在）

泊大塚古墳の記録は古く江戸時代にまで遡ります。福岡藩の国学者青柳種信^{あおやぎたねのぶ}は『筑前国続風土記拾遺』の中で、かつて泊大塚古墳の墳丘上に鎮座していた熊野神社について紹介して

います。この中で、古墳のことに触れています。社殿の下が空洞があり、石棺が存在する可能性があること、地中から獣^{けもの}の形に似た石が出たこと、古墳の形が奈良にある古墳と似ていることなどを記し、また、古墳の大きさについても詳細に記録しています。その後も泊大塚古墳は考古学者の注目を集め、大正期には高橋健自、中山平次郎などが現地を訪れ、多くの所見を残しました。現在は開発などにより古墳の形が大きく変わっていますが、このような古い記録が残っているお蔭で、元の古墳の姿を推測することができます。

【調査・研究史略年表】

- 文政 6 (1823) 年 青柳種信が泊大塚古墳を訪れ、記録を残す
- 明治 43 (1910) 年 泊大塚古墳の上にあった熊野神社の社殿が泊八幡宮に合祀される。
- 大正 5 (1916) 年 泊大塚古墳において高橋健自が銅剣二口と管玉が出土したことを報告する。
- 大正 6 (1917) 年 泊大塚古墳と御道具山 1・2 号墳について中山平次郎が報告する。
- 昭和 62 (1987) 年 御道具山古墳 1 号墳の墳丘調査と同 2 号墳の主体部の確認調査が行われる。2 号墳では攪乱を受けた箱式石棺が確認され、攪乱土内から二口分の鉄剣片が出土した。
- 昭和 63 (1988) 年 泊大塚古墳の墳丘測量を実施する。
- 平成 31 (2019) 年 泊大塚古墳のトレンチ調査を行う (第 1 次調査 遺跡の現地説明会を実施)

3. 古墳の構造

泊大塚古墳は前方部と後円部の東側が大きく削られているため、現在では元の古墳の形態や規模はわかりにくくなっています。そこで、現況の測量図だけでなく、古い航空写真や地籍図^{ちせきず}、江戸時代の記録なども参考にして形態や規模を推定しています。

- ・ 古墳の形態 前方後円墳
- ・ 古墳の規模 (推定) 全長 74.8m 後円部直径 45.6m 前方部長さ 22.5m
前方部幅 33m くびれ部幅 21.2m
- ・ 主体部の形態 不明 (箱式石棺か?)
- ・ 古墳の時期 (推定) 古墳時代前期前半

【岡部・中牟田 2018 から引用】

今回の発掘調査では墳丘斜面に葺石が葺かれていることが確認できました。葺石は直径 20 cm以下のサイズのものが多く、石材は花崗岩と玄武岩が大部分を占めていることが観察できました。このうち玄武岩は角が取れ、丸いものが多いため、波打ち際で採取されたものと推測されます。葺石は現状で墳丘斜面上部と墳丘裾部近くの 2 箇所に残っている状態でしたが、かつては斜面全体に葺かれていた可能性があります。墳丘斜面の裾付近では、長い年月の間に崩れ落ちたと考えられる石が溜まっている状況も確認できました。

墳丘の斜面は途中で傾斜角度が変わっており、墳裾近くの標高約 11.5m～15.1m付近にかけては傾斜が急で、平均勾配 76%（角度約 36°）、標高 15.1m～16.0m付近が平均勾配 24%（角度約 14°）、標高約 16.0m～20.0m付近にかけては平均勾配 53%（角度約 28°）となっています。今回の調査トレンチでは確認できませんでしたが、標高約 16m付近から墳丘上位にかけては土が脆い傾向にあり、弥生時代中期の土器や石器等が墳丘内から出土することから盛土である可能性が考えられます。

出土遺物としては弥生時代中期の土器や石器の他、古墳時代初頭の土器の破片が出土しています。弥生時代の石器の中には船の碇石に使われたとされる大型の錘があり、古墳の葺石の中に混じっていました。このように弥生時代の遺物が古墳から多く出土する理由としては、古墳を築く時に使った土を採取した場所にかつて弥生時代の集落があったからではないかと考えられます。

古墳時代の遺物については泊大塚古墳の築造年代を考える上で貴重な資料となりました。今後、検討を加えていこうと考えています。

4. おわりに

今回の説明会を実施した泊大塚古墳は後世の削平により、形を大きく変えています。しかしながら、現在においてもその威容は往時の姿を想像するのに十分であり、長い年月に渡って地域の皆さまに大切に守られてきた賜物であると考えます。

今回の発掘調査は古墳全体から見るとごく一部であり、墳丘の姿を復元するには至っておりません。市教育委員会では追加の発掘調査を実施し、その全容の把握に努めると共に、保存方法についても検討したいと考えています。

末筆となりましたが発掘調査の実施に関し、多大なご協力を賜りました泊一行政区長

の中園様、古墳のいわれや伝承などをご教授くださいました古墳近隣にお住いの皆さま、古墳の撮影と 3D モデルを作成して頂きました九州文化財計測支援集団の永見様、久保様、空中写真撮影を実施して頂きました九州歴史資料館の岡寺様、このほか、関係各位に心から感謝申し上げます。

【周辺の古墳 御道具山 1 号墳】

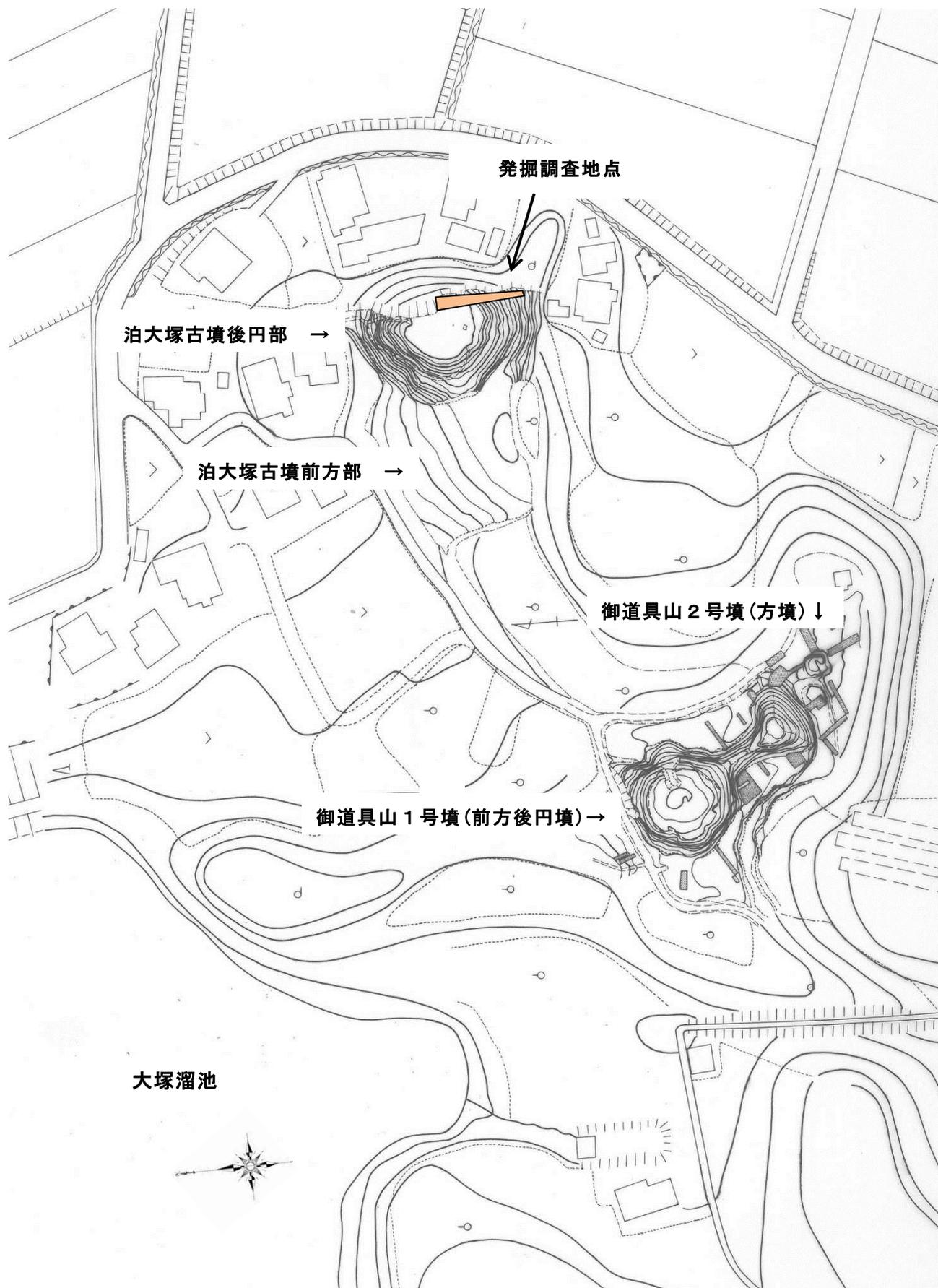
御道具山 1 号墳は泊大塚古墳の南西部に位置する前方後円墳。全長は約 65m、後円部直径 40m、前方部の長さ 26m、前方部幅 25m で、泊大塚古墳より一回り小さなサイズですが、糸島地域においては大型古墳に分類されます。

前方部が撥形に開いており、前方後円墳の中では最も古い形であることから糸島地方最古級の前方後円墳といわれており、泊古墳群の中で最も早く築かれたと考えられてきました。ただ、今後の調査の結果によって、泊大塚古墳の年代が確定した暁には御道具山と泊大塚の両古墳の築造時期に関する前後関係が逆転するのではないかと考える研究者もいます。

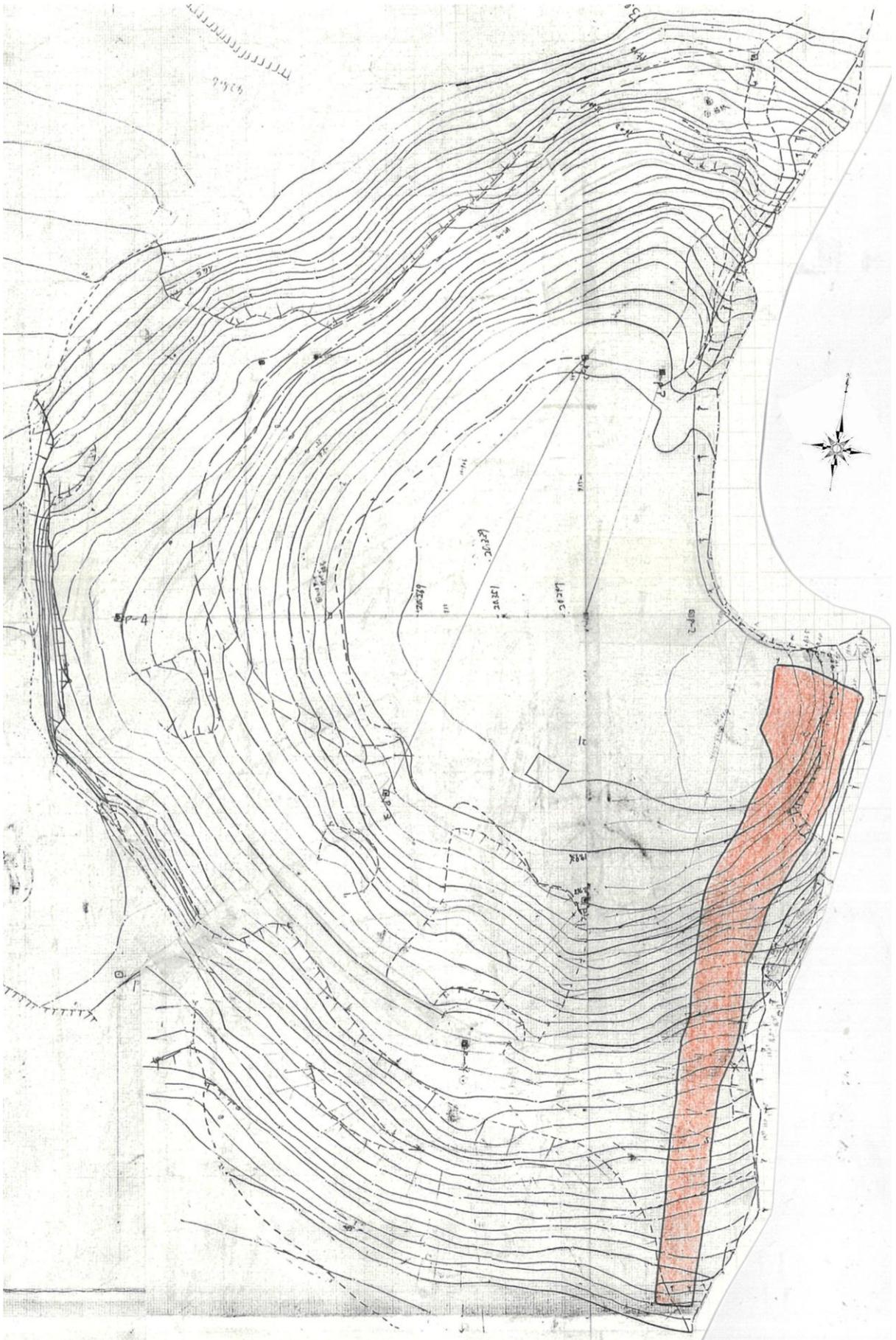
いずれにしても、糸島地域最古級の大型古墳を擁する泊古墳群は糸島のみならず北部九州の古墳文化を考える上で重要な遺跡といえます。

【本文・挿図の引用文献】

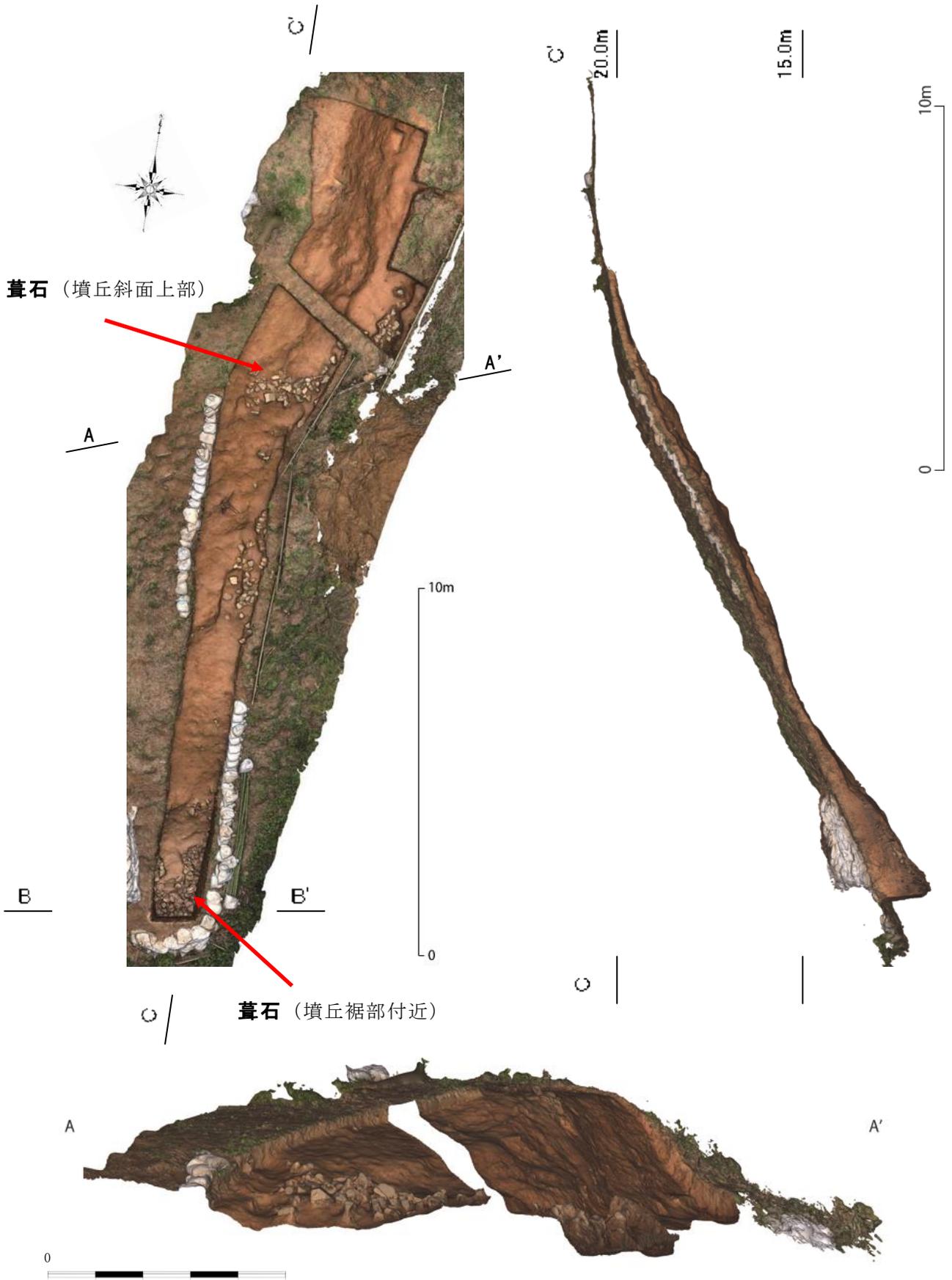
岡部裕俊・中牟田寛也 2018 「青柳種信が見た泊大塚古墳－『筑前国續風土記拾遺』に記された糸島半島の古式前方後円墳－」『糸島市立伊都国歴史博物館紀要』第 13 号



泊大塚古墳群の周辺地形と遺構の配置(1/1200)



泊大塚古墳の後円部墳丘測量図と発掘調査区の位置 (1/200)



© 2019 九州文化財計測支援集団 (撮影：永見秀徳氏、久保伸洋氏)

泊大塚古墳 発掘調査区平断面 3D モデル 1 (1/150)



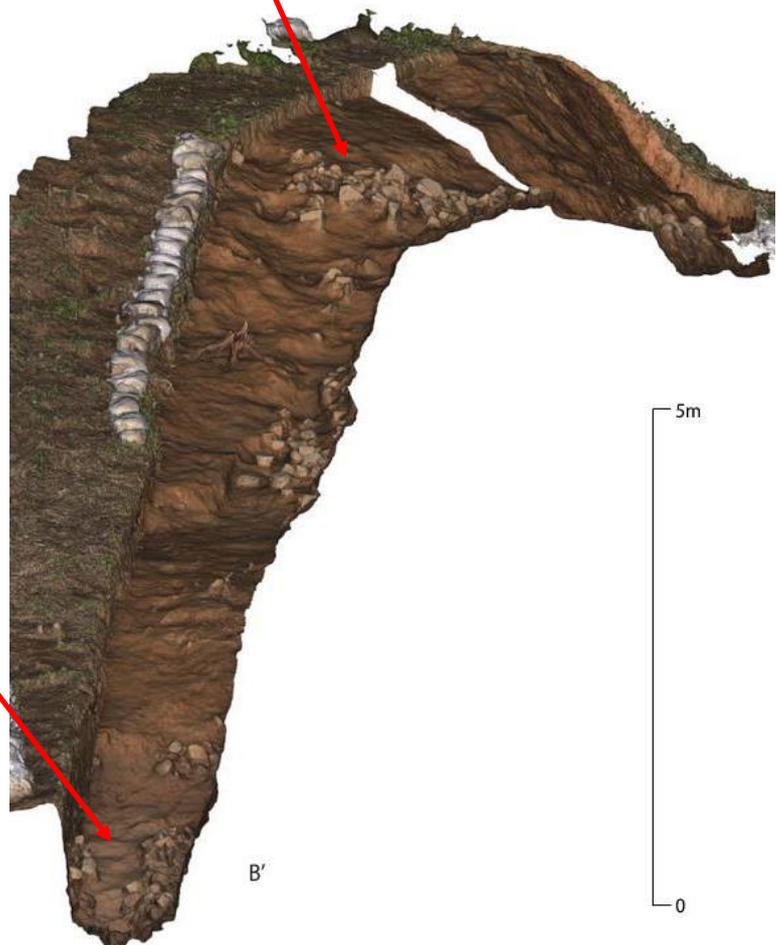
QRコードをスマホで取り込んでみよう。
発掘調査区の3次元データが見られるよ。
(パケット通信料がかかることがあります)



葺石のようす (墳丘斜面上部)



葺石のようす (墳丘裾部付近)



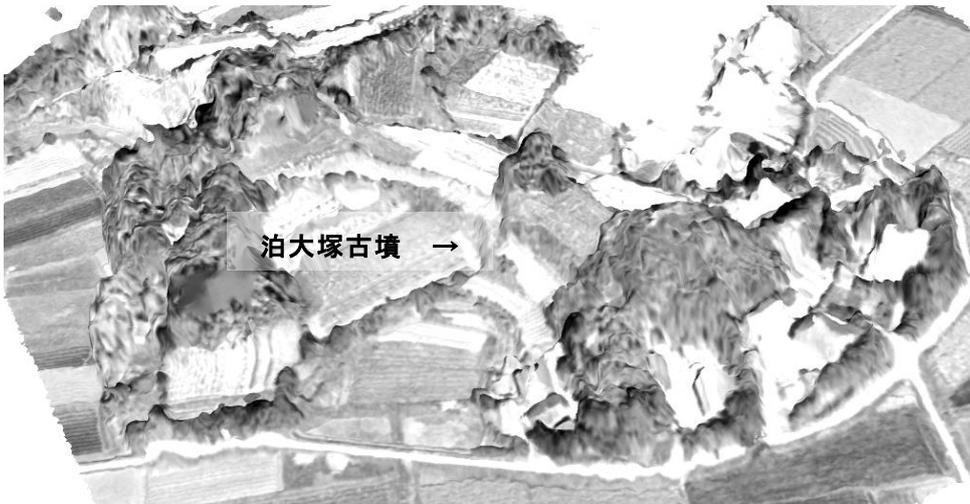
© 2019 九州文化財計測支援集団 (撮影: 永見秀徳氏、久保伸洋氏)

泊大塚古墳 発掘調査区平断面 3D モデル 2 (1/150)



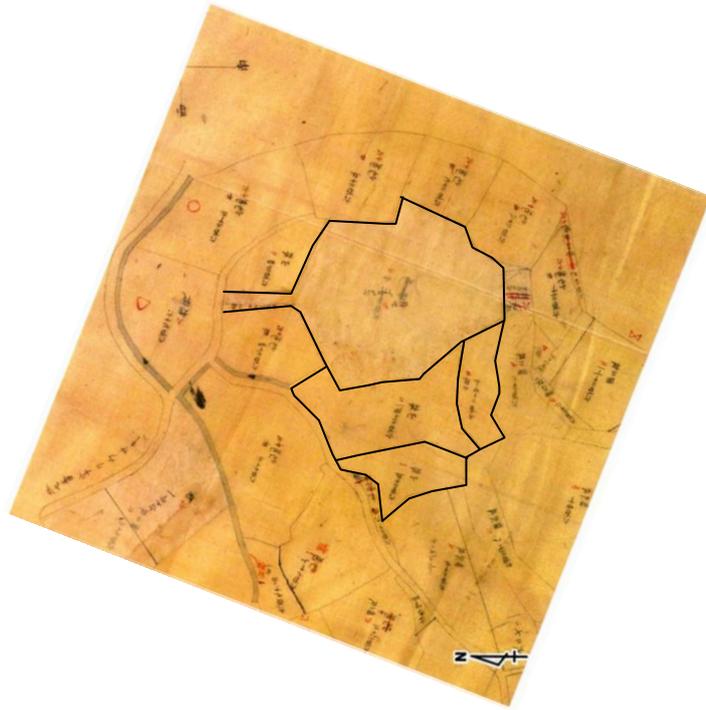
泊大塚古墳 昭和 35(1960)年の航空写真

泊大塚古墳 ↓



© 2019 九州文化財計測支援集団 (代表者 永見秀徳氏)

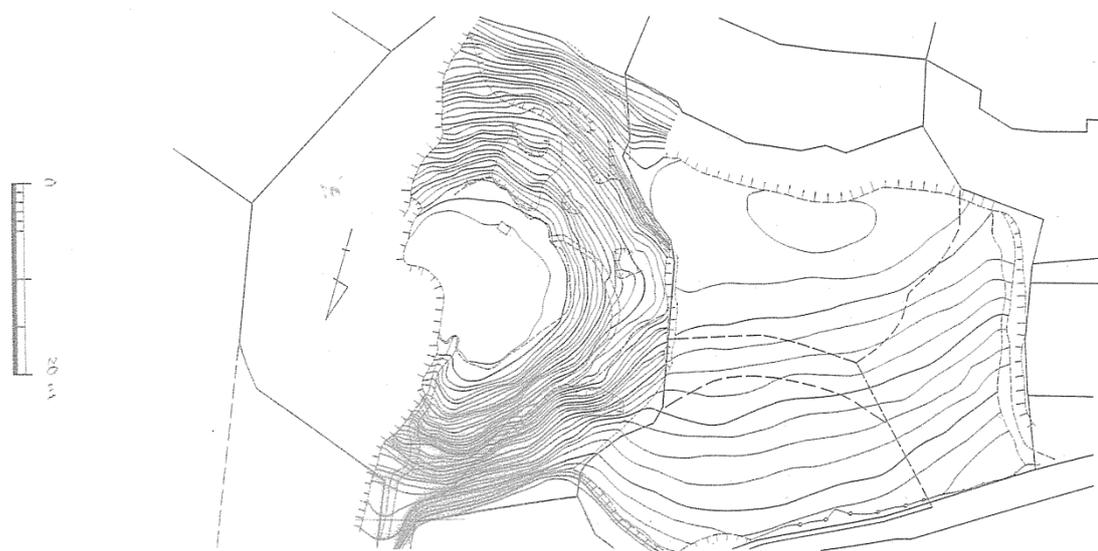
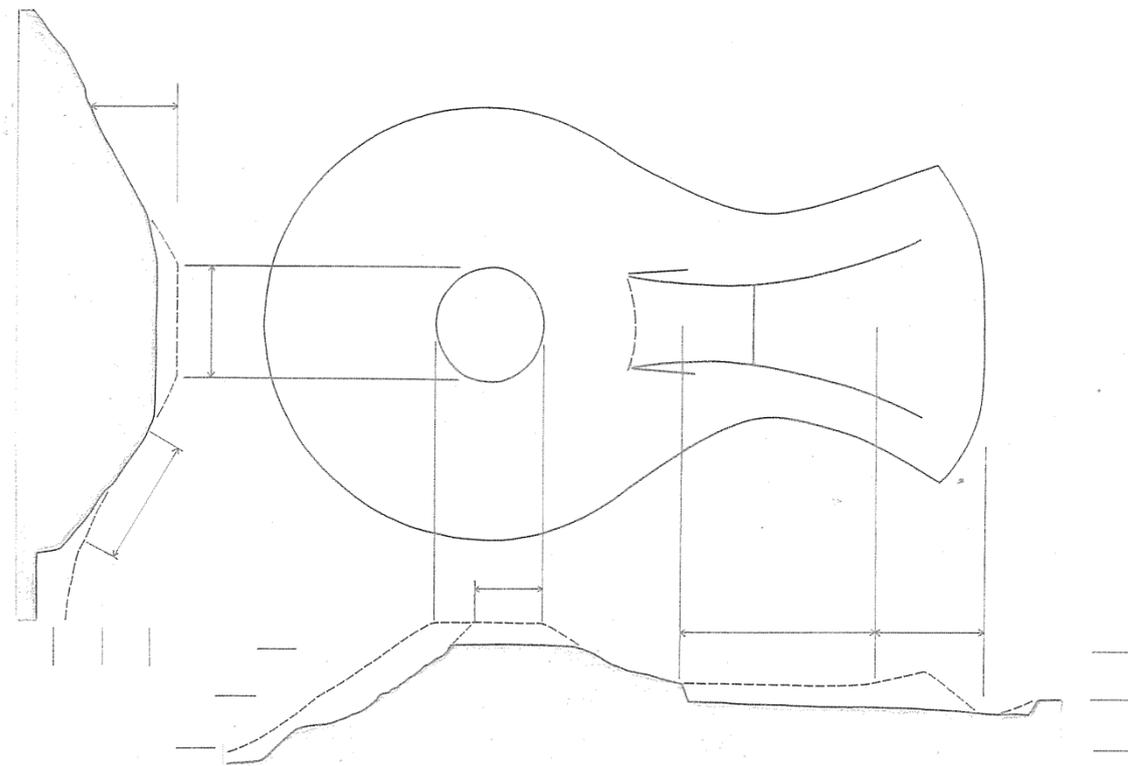
泊大塚古墳 昭和 35(1960)年の航空写真 3D モデル



出典：岡部裕俊・中牟田寛也 2018

泊大塚古墳周辺の地籍図

(明治～昭和初期頃 (上、約 1/1200)、1960 年製 (下、1/1200))



出典：岡部裕俊・中牟田寛也 2018

泊大塚古墳 墳丘旧地形推定図（上）、残存墳丘地形・地籍合成図（下）

熊野神社

大塚に在。此所の産神なり。所祭紀州熊野三所の神なりと云。祭禮九月廿二日也。此神社の地は大に築たる塚上也。本社のある所を強く踏は地下に鳴声あり。これ地中空虚あるか故也。石棺この内に在へし。近年地下より獸の形に肖たる石一ツ出たり。古昔の陵墓に立たりし石人石馬等の類にしてこ八隼人に擬したる石狗なるへし。大和國添上郡元明天皇の陵の隼人石の類ひなり。圓丘高石階四丈一尺北面也。冢上の廣横四間入六間半有。四方に林木茂れり。南方に峽有。長拾壹間其尾の末に小山有。其上平なる所六間有。これ地道の入口なるべし。大和國等にあるいにしへの陵の形状皆かくのことし。凡て此塚山の廻り八十六間半有。其外八田なり。是むかしの池隍の址なるへし。此塚ある故に人家をも大塚といふ。いにしへいかなる人の墳陵なりしやいまた其由を知らず。

出典…青柳種信『筑前國續風土記拾遺』卷五十 志摩郡下 福岡古文書を読む会編校訂 (文献出版、一九九三年)

【意識】

熊野神社

(熊野神社は)大塚にある。この地の産神様である。紀州熊野の三神を祭っているという。祭礼は(旧暦の)九月二十二日に行われる。この神社は大きく築かれた塚の上にある。社殿のある所を強く踏むと、地下から共鳴音が聞こえる。これは地下に空洞があるためで、石棺がこの地下に埋もれているのだろう。

近年、地下から獸の形に似た石が一個出土した。大昔の陵墓に立てた石人石馬の類で、隼人(塚)から出た貊石をまねてつくられたのであろう。(大和國添上郡元明天皇の隼人石のようなものである。)

墳丘は高く、(その)北(斜)一面には石段が四丈一尺(約十二・四二三^尺)ほど続いている。塚の上の広さは、横四間(約七^尺)、幅六間半(十二^尺)ある。四方に木立が茂っていて、南には谷が入り込んでいる。墳丘から続く尾(のような前方部)は長さが十一間(約二十^尺)ほどあり、その先が小山になっていて、上は平坦面が六間(約十一^尺)ほど続いている。これが塚の入口にあたるどころだろう。大和國に残る昔の(天皇の)陵の形は、みんなこのようになっていて。

およそ、この塚山の周囲は八十六間半(百五十六^尺)ある。この周囲は水田となっているが、昔の水濠の痕跡なのだろう。この塚があるため、この集落は大塚と呼ばれている。遠い昔のどんな貴い方の墓なのか現時点ではその云われはわからない。

出典…岡部裕俊・中牟田寛也、二〇一八)

現地説明会資料は後日、糸島市文化課のホームページ内にて公開する予定です。
カラー写真にて掲載しておりますので、ぜひ、ご利用ください。

HPアドレス <https://www.city.itoshima.lg.jp/s33/>



QRコードをスマホで取り込んでみよう。
発掘調査区の3次元データが見られるよ。
(パケット通信料がかかることがあります)